

The Location Around The World

行ってみたい名作の舞台へ…





■ ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世のガッレリア



「冷静と情熱のあいだ」で、あおいが暮らしたミラノ 石畳を走る、レトロな市電が似合う街

③1ミラノ(イタリア)

「ロミオとジュリエット」に負けないラブストーリーであり、斬新なスタイルで話題となった江國香織×辻仁成の小説の映画化作品「冷静と情熱のあいだ」(2001)で、主演ケリー・チャン扮する“あおい”が暮らしていたのがミラノだ。彼女が勤めていた宝石店「FORME NOBILI」は実在のお店。メトロのポルテ・ロマーナ駅で降りて、レトロな市電の走るモンテ・ネロ通りを北東に500メートルほど歩いたところにある。この界隈は、あまり観光客が訪れないエリアなので、本当のミラノらしさを味わうことができる。あおいがマーヴを追いかけるシーンに出てくる公園も店のすぐ前で、ここのベンチに座って物思いにふけるのもいいかも。

あおいが順正の手紙に心動かされて彷徨うシーンは、ドウオモから続くダンテ通りで、歩行者天国のようになっている。この辺りから大聖堂ドウオモ、ガッレリア、スカラ座、そしてモンテ・ナポレオーネ通りにかけては、まさに観光の中心地で、世界中からの旅行者でいつも賑やかだ。余談だが2003年に訪れたときもドウオモは改修工事中だったが、今なお工事中。写真を撮るなら北東側から見上げるように撮ればいい感じだ。感動のラストシーンはミラノ中央駅。ドウオモからはメトロで4駅だ。

とはいえ、ローマ、ヴェネチア、フィレンツェ…に比べると、観光という意味では、ミラノは正直あまり面白くないかも。ドウオモと、映画「ダ・ヴィンチ・コード」でも話題になった、レオナルド・ダ・ヴィンチの傑作「最後の晚餐」が飾られている、サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会、ブレラ美術館くらいが目玉の観光スポットだが、「最後の晚餐」の見学は完全予約制で、いつも2週間ほど先まで埋まっている。見学したい方は、必ず予約を。

観光というよりは、ミラネーゼ(ミラノっ子)たちとっしょに洒落た空気の中で、のんびり時を過ごすのがおすすめ。街角のカフェでカプチーノを飲みながら読書をしたり、もちろんブランド・ファッションのメッカとも言えるモンテ・ナポレオーネ通りのショッピングを楽しむのもセブ流。もっとも最近ユーロ高の影響で、日本人がショッピングしても、決して安くはない。でも、本店ならではの最新作に出逢えるかも…

今回は、順正が暮らしていたフィレンツェ。乞うご期待。



■ミラノの中心ドゥオモ



■感動のラストシーンはミラノ中央駅



■大都会でもクラシカルな市電がよく似合う



「冷静と情熱のあいだ」のロケ地、フィレンチェ 永遠の愛と出逢えるロマンティックな街並み

③2フィレンチェ(イタリア)

ミラノに“あおい”が暮らしていたのに対して、フィレンチェは竹野内豊演じる“順正”が暮らしていた街。多くのシーンが、このロマンティックな街で撮影された。まずは純正が絵画修復士を目指し、この地に訪れる冒頭シーンで登場するウフィッツィ美術館はフィレンチェ観光のハイライトでもあるので、入館にはいつも長蛇の列。アルノ河畔のこのエリアは、有名なヴェッキオ橋もあり観光客でいつも賑わっている。橋を渡って左岸のピッティ宮からサント・スピリト教会の間には純正が修復士として働いていた工房があるところ。実際にこの辺りの細い路地には小さな美術修復工房が点在している。

左岸をヴェッキオ橋から東に1キロほど行くと、順正とあおいが大学時代の知人チェリストの奏でる思い出の曲を聴くポッジ広場がある。ここまで来たら小高いミケランジェロ広場の上って、フィレンチェの全景を眺めてみたい。ドゥオモが中心となった素晴らしいパノラマが広がる。

とはいえロケ地としてのハイライトは、やはりドゥオモのクーボラ。「恋人達のドゥオモ」は、クーボラの先までたどり着くまでが大変で、実に500段ほどの狭く急な階段を登って行かなくてはならない。でも、その試練?の後の絶景の素晴らしさは格別。そしてここに登ったカップルは、永遠の愛で結ばれるという…から、カップルで訪れた方はちょっと辛いけど、頑張っって制覇して欲しい。

あと、順正がミラノに訪れ、あおいと再会するパーティのシーンは、実はアルノ河畔右岸にあるグランド・ホテルで撮影されたという。フィレンチェ中央駅では、順正がバイクで駆けつけるシーンなどを撮影。ミラノ中央駅と同じく、いつも賑わっている駅なので、撮影はさぞかし大変だっただろう。街全体がロケ地に使われたフィレンチェ。その景観はイタリアのなかでもローマと並び素晴らしい。しかしローマの古代遺跡群とはまた違った趣を感じる。それは14~16世紀、ギリシャ・ローマ時代の文化・芸術復興と人間性尊重を謳った「ルネサンス」が生まれた街ならではの気品と賢人達の志が、今も脈々と街の空気に伝わっているよう。そんなオーラが、街全体にロマンティックなムードを醸し出しているのだろうか…本当に恋人達が似合う街だ。



■ 絵画修復工房が点在する路地



■ 思い出の曲を聴いたポッジ広場



■ あおいと順正が再会するシーンが撮影されたグランド・ホテル

古き佳き時代が見事に描かれた、名作 「眺めのいい部屋」もフィレンチェが舞台

③③フィレンチェ(イタリア)

19世紀の貴族社会におけるラブロマンスを描いたE・M・フォスターの小説「眺めのいい部屋」をジェームズ・アイボリー監督が映画化した同名作。時代考証をしっかりと押さえた衣装が、美しい映像に映える名作だ。1987年のアカデミー賞では、脚色賞・美術賞・衣装デザイン賞の3部門を受賞している。

冒頭のシーンでジョージに部屋を換わってもらうホテル、ペンシオーネ・ベルトリーニは、ベッキオ橋にほど近いホテル・デリ・オラフィ。エントランスは小さいが、部屋からの眺めは本当に素晴らしい。一人、探検のように街に出たルーシーが男達に絡まれるシーンは、サンタ・クロチェ教会のダンテ記念碑の前で撮影。この教会は、多くの文化人が埋葬を希望したことで有名で、かのミケランジェロやガリレオなどの墓もある。さすがルネサンス発祥の地。男の一人がナイフで刺され血が流れる喧嘩のシーンは、教会の外に出てすぐと思ってしまうのだが、そこはカット割りの妙。実は300メートルほど離れたヴェッキオ宮前のシニョリーナ広場。男が介抱されるネプチューンの噴水もここにある。ルーシーが座り込んでいる場所は、数体の彫刻が並ぶランツツィのロτζギア(回廊)。これらの方が彼女の滞在していたペンシオーネ・ベルトリーニ(ホテル・デリ・オラフィ)からは、数十メートルしか離れていない。ロケ地が至近距離にまとめられていて楽ちんだ。

後半の舞台はイングランドに移ってしまうのだが、とにかく出逢いの大切な鍵を握っているのがこの街。「冷静と情熱のあいだ」とは作品のテイストは違うが、「運命の恋」に悩むヒロインの心情という点では似通っている。やはり、フィレンチェはロマンスが似合う街なのだ。是非とも恋人同士、ご夫婦でゆっくり訪れて欲しい。できればツアーで走り抜けるような旅よりも、それこそ眺めのいい部屋で3~4日ゆっくりと滞在してみてもいい。美術館巡りだけでなくトスカーナ料理を堪能するのもよし、ブランド好きな方には、フェラガモやグッチの本店があることも見逃せないかも。





■ドゥオモの上から眺めたフィレンツェの街並み



■眺めのいい部屋のあるホテルのエンタランスは意外に小さい



■ルーシーが座り込んだランツィのロジア



■こんな絵師があちこちで腕を披露



■恋人たちが似合う街、フィレンツェ



■サンタ/クローチェ教会



■伝統のお祭りに出くわした

「ライフ・イズ・ビューティフル!」の AREZZOは文句なくビューティフル!

③4 アレッツォ(イタリア)

フィレンツェ郊外のロケ地といえば、筆者イチオシなのが「ライフ・イズ・ビューティフル!」の舞台となったアレッツォという街。1998年のアカデミー外国語映画賞、主演男優賞を受賞したほか、各国で数多くの賞を獲得した名画。筆者も心うたれた大好きな映画で、監督・脚本・主演は、あのロベルト・ベニーニだ。

世界大戦の色濃くなるイタリアの田舎町での家族の絆、そして母と子が引き裂かれて、なおも明るく健気に生きていく息子と父。しかしついに悲劇的な最期が…。とはいえ、この映画、観終わった後でも悲愴感ではなくて、なぜか明るい希望…まさに「ライフ・イズ・ビューティフル!」と叫びたくなるような感動を与えてくれる作品。古い映画には、こんな素晴らしいテーマの作品も多いんだなあ…と、よく考えてみれば1997年にイタリアで発表されたもの。そう考えると、ベニーニ監督の時代の描き方に脱帽してしまう。知らずに見ていると50年とか60年代とかの映画と誤解してしまうかもしれない。

そんな時代の描き方の鍵を握っているのが、AREZZOの街でもあるのだ。第二次世界大戦の爆撃をまぬがれたという街は、中世の建物が今も残り、それらが左右に隣接した石畳の細い路地が多い。そんな路地の坂道を主人公ガイドは、自転車で駆け下りていた。

映画のロケに関しては、何度も出てくるおなじみの広場「グランデ広場」を中心に、そぞろ歩けば、親切にも「ここでこんなシーンを撮影しました」看板が表示されている。それをたどれば楽ちんだ。ガイドが開店した本屋も、坂道を少し上がればすぐに見つかる。ほんとに小さな街なので、街全体がロケ地というよりまるでスタジオ・セットみたいなもの。深呼吸するように、ゆっくりと街の空気に触れているのが心地よい。トスカーナ地方なので、おいしい料理にも巡り会えるかもしれない。毎月第1土・日に開かれる「骨董市」も有名だそう。残念ながら筆者は時間がなかったのでフィレンツェへ帰ったが、余裕があれば本当に次は2~3日泊まって、ゆっくりとガイドとなぞなぞを解いてみたい…そう思った。

PS/個人的なことですがこの記事執筆の前日、心筋梗塞に倒れ、心臓バイパス手術の前夜にもかかわらず、病室で朦朧としながら書き上げたのがこの回の文章。「60%は覚悟して欲しい」と家族が告げられるような状態から九死に一生を得て、後から気がつく、なんたることかその時の執筆作品がこの「ライフ・イズ・ビューティフル!」。運命すら感じるような出来事でした。この街のおかげか、今は驚くほど元気になりました。



■ガイド親子の本屋



■ロケ現場にはこんなサインがある



■駅も鄙びたいい感じ



■辺りには肥沃な大地が広がっている



TRATTORIA
IL SARACENO

PIZZERIA
TRATTORIA

PIZZA
CROSTINI
BOLLITA
FARRO
RICE
TRIPPA
AMARILLO
SINGHILE
MORFINA

TRATTORIA
IL SARACENO

ETNO

PIZZA
ON PUSO
LEONA

6

Alc. 18°
in 18°

■トラットリアも飾らないいい感じ



■度々出てきたグランデ広場



■食料品店も味がある



■ポルチーニの季節!



街全体が計算尽くされたセットのような「ローマ」 歴史の綾が映画関係者を魅了する街

②ローマ(イタリア)

ジョージ・クルーニー、ブラット・ピット、マット・デイモン、ジュリア・ロバーツ…など超豪華キャストとその胸をすくような面白さで大ヒットしたリメイク映画「オーシャンズ11」(2001)。その続編「オーシャンズ12」(2004)で、重要な意味を持っているロケ地がローマだ。プロデューサーのジェリー・ワイントロブが前作「11」のプロモーションツアー中に立ち寄ったローマに一目惚れ。続編「12」の制作を決意したとか。テルミニ駅やパンテノン、故フェリーニ監督お気に入りのランチスポットと言われるコルソ通のグランドホテル・ブラザなどがロケ地となり、ストーリーに深みのあるイメージを与えている。

街全体が計算尽くされた映画のセットといっても過言ではないほど格好のロケーションイメージをフィルムに焼き付けてくれるローマ。「ロケ地」ということを抜きにしても、やはり世界で五本の指に入る第一級のディスティネーションではないだろうか。二千年を超える悠久の歴史が今もなお息づき、古代から現代の最先端までそれぞれの時代が“綾”となり絶妙に重なり合っている。さらに、それらの印象を深めてくれる太陽の光と影。

そしてまた感動的なのは、街中をちょっと歩くだけで、あちらこちらに見つけることができる古代ローマ時代の遺跡の断片。どこかの国のように「遺産」となると、ご丁寧に過剰管理されているのではなく、さり気なく転がっている感じがいい。コロッセオやファロ・ロマーノ周辺の遺跡群では、さほど歴史に興味がなかった私でも、そのスケールの大きさをひしひしと感じる。教科書でしか知らなかった英雄カエサルが、暴君ネロが、同じ土の上で夕陽を眺めたと思うと妙に感動してしまう。

何度でも旅してみたいローマ。これからもまた、新しい「ロケ地伝説」を生んでくれるに違いない。



■パンテオンは人気の観光スポット



■遺跡があちらこちらにゴロゴロ転がっている



■コロソ通りでマラソン大会に遭遇。左の観客は誰？

「ダ・ヴィンチ・コード」の続編「天使と悪魔」 ローマを駆け巡るサスペンス・ミステリー

④2ローマ(イタリア)

ローマを取りあげるのは、この連載が始まった2005年の2回目から実に4年ぶりだ。今回のローマは、間違いなく今年の問題作になるであろう5月公開予定「天使と悪魔」のロケ地として。06年に話題となった「ダ・ヴィンチ・コード」の続編…というか、実は原作者ダン・ブラウンが「ダ・ヴィンチ・コード」の前作として書きたい小説らしい。監督は同じくロン・ハワード。主役もミッキー・マウスの時計がトレードマークの宗教図像解釈学者ロバート・ラングドン訳がすっかり板に付いたトム・ハンクスが演じる。

今回も前作と同じくキリスト教の知識が重要となってくるので、その素養の少ない日本人にはやや難しいが、今回はローマ・カソリックの総本山、バチカンに集まった時期教皇候補の4人の枢機卿が次々と殺されていくというサスペンス・ミステリー。まだ映画を見ていないから何とも言えないが、原作を読む限りでは「ダ・ヴィンチ・コード」より、ハラハラ・ドキドキのアクション性は高いかもしれない。

そんな期待作のロケが昨年、ローマ市内で行われた。とはいえテーマがテーマなので製作サイドは協会側とじっくりいかなかったらしく、いくつかの協会では内部撮影を断られたりして、苦汁をなめたらしい。作品で一番のテーマとなってくるサン・ピエトロ大聖堂とバチカン美術館にはミケランジェロの「最後の審判」やラファエロの「アテネの学堂」、ダ・ヴィンチの「聖ヒエロニムス」など教科書でおなじみの作品が展示されている。

なかでも重要シーンの教皇選出選挙「コンクラーベ」が行われるシスターナ礼拝堂の、壁面いっぱいに描かれた「最後の審判」は圧巻の一言。美術館は映画には登場しないかもしれないが、今から公開が楽しみな作品だ。





■サン・ピエトロ大聖堂は物語の重要な場所



ラングドンが飛び込んだ「四大河の噴水」など3つの噴水があるナヴォーナ広場



■サンタ・マリア・デル・ポポロ協会では撮影が禁止された



■ヘップバーン・カットを生み出した美容院のある設定のトレヴィの泉

ローマの映画といえばやっぱり「ローマの休日」。時代を超えて愛される名作中の名作

④3ローマ(イタリア)

主人公の旅先などでちょくちょく出てくることはあっても、映画全編の舞台となったローマは、パリやロンドンに比べて格段に少ない。しかしながら、映画のロケ地巡りという旅の目的では、ローマの人气がダントツに高い。それはもちろん名作「ローマの休日」のお陰だ。ウィリアム・ワイラー監督は、すべての撮影をこのローマで行った。

オードリー・ヘップバーン扮するアン王女がジェラートを食べるスペイン階段はいつも観光客賑わっている。そこからバフィーノ通りをポポロ広場の方にぶらぶら行くと、「カフェ・ノテーゲン」と書かれた跡が残る看板のある店がある。(どうも廃業されたような…)このカフェでアン王女とジョーがシャンパンとアイス・コーヒーを飲み、フォトグラファーと出会うシーンが撮影された。映画ではパンテオン前のオープンカフェという設定だが、実際は撮影はこの店で行われたようだ。そしてそこから一本通りを入ったマルグッタ通り51番地がジョーの住んでいたアパートだ。

このエリアから南の方へ行くと、アン王女が髪の毛をバツサリと切り伝説のヘップバーン・カットを生み出した美容院がある設定のトレヴィの泉がある。(美容院はあくまで設定で、実際にはなかったようだ)ここもローマ観光には外せないポイント。さらに南に行くと、ジョーとアン王女がヴェスパに乗って最初に向かう有名なコロッセオがある。ここではぜひとも内部の見学を。ローマ時代の建築技術の凄さを実感できる。その辺りからフォロ・ロマーノを超えて西の方角、テヴェレ川沿いにあるのが印象的なシーンで有名な「真実の口」のある聖マリア・イン・コスメティン教会だ。川沿いの道を北に向かうとハチャメチャ・パーティのシーンが撮影されたサンタンジヨロ城たもとのテヴェレ川クルーズ乗り場に到着。そこからさらに西にいけばサンピエトロ寺院、東に戻ればスペイン広場…と、少々距離はあるが、決して歩けない距離ではない。カメラ片手に永遠の名作のロケ地を満喫して欲しい。



■「ローマの休日」と言えば、やっぱりVespa! この人ドイツから乗ってきた??



■「カフェ・ノテーゲン」は閉店していた



■ローマ観光の定番スポット「真実の口」



■スペイン階段は芋の子洗い状態



■コロッセオは、やはり偉大な遺跡だ



■食事もテラスが気持ちいい



■イタリア式雑炊?もお洒落

パリを舞台に繰り広げられるラブ・サスペンス オードリー・ヘップバーン主演「シャレード」

④4パリ(フランス)



「ローマの休日」で一世を風靡したオードリー・ヘップバーン。その10年後にあたる1963年に彼女が主演したのが「シャレード」で、今度はパリを舞台にした軽いタッチのサスペンス映画だ。オードリーには同じくパリを舞台にした作品に、本作と同様スタンリー・ドーネンがメガホンを取りフレッド・アステアと共演したミュージカル作品「パリの恋人」もあるが、「シャレード」の方が彼女にははまっているような気がする。

ケーリー・グラント、ウォルター・マッソー、ジェームズ・コバーン、ジョージ・ケネディという第一級俳優たちが謎めいた悪役(?)達が、25万ドルを残して殺された夫の未亡人役のオードリーを追い詰めていくという、ヒチコック張りのストーリー。一体誰が真犯人なのか?そして25万ドルはどこに?

オードリーのすべての衣装をジバンシーが手がけ、当時としては超トレンディなファッションが話題となったそうだ。また61、62年と2年連続アカデミー主題歌賞に輝いたヘンリー・マンシーニを音楽監督に据えてことでも、カの入れようがうかがえる。

ロケ地として、まずこの作品で有名になったのが、彼女たちが宿としていたホテル・サン・ジャック。セーヌ川左岸、ラテン・クォーターのサン・ジャック駅近くにあるホテルで、改修を繰り返しリーズナブルな価格で泊まれる人気ホテルだ。セーヌ川まで行くと、対岸にノートルダム寺院が見えるモンテペロ河港の遊歩道に出る。ケーリー・グラント演じるピーターの服にジェラートを付けてしまうシーンが印象的だった。

シャンゼリゼ通りの中程にあるシャンゼリゼ公園は、映画では古切手市が開かれて謎解きが大きく進展する場所。残念ながら映画のようなメリー・ゴーランドは、今は見当らない。そしていよいよクライマックスはパレ・ロワイアル。ルーブル宮殿(美術館)の北側に位置する元王宮で、回廊には現在ブティック、画廊、骨董品店などが軒を連ねており、デザインされた中庭が美しい。

ローマもいいけれど、オードリーにはパリのほうが似合うような気がするのは僕だけだろうか…。



■モンテペロ河湾の遊歩道。対岸にはノートルダム寺院が



■シャンゼリゼ公園で切手市はやってなかった



■クライマックス・シーンが撮影されたパレ・ロワイヤル



「ダ・ヴィンチ・コード」の大ヒットで ミステリアスさも加わったルーヴル美術館の魅力

④5 パリ(フランス)

ダン・ブラウンの小説「天使と悪魔」の続編として書かれた「ダ・ヴィンチ・コード」だが、映画ではロン・ハワード監督がこちらを先に製作して大ヒット。主役はトム・ハンクス演じるロバート・ラングドン教授、そして本作で彼と行動を共にするソフィーにはオドレイ・トトゥ。あの代表作「アメリカ」で見せた独特のキャラクターとは180度違う役柄での登場だ。

物語の重要な舞台となるのは、パリのナンバー・ワン観光スポットであるルーヴル美術館。冒頭のシーンでソフィーの祖父であるジャック・ソニエールがシラスに追い詰められ、額を外して警報装置を作動させる絵画「聖母の光」(カラヴァッジオ作)はドノヴァン・ウイングにある。ほど近い部屋には、一番人気「モナ・リザ」が展示されているが、ご多分にもれずいつでも超満員だ。

ローズラインと呼ばれる子午線の下に眠る「キーストーン」の隠し場所として、最初に登場したサン・セルピッシュ教会はセーヌ左岸。ここのオペリスクの床を真夜中にシラスが独り掘り起こすシーンはドキドキものだった。しかし、ここにあったのは偽の「キーストーン」だった。余談だが、教会によると、確かにここにある真鍮の線は正確な子午線を表しているそうだが「ローズライン」と呼ばれたことは一度もないとか。あくまで小説上のネーミングらしいが、その謎めいたイメージは脱帽もので妙にワクワクしてしまう。

映画とは関係ないが、ヴェルレーヌ、ランボー、ピカソ、ヘミングウェイ…と名だたる芸術家、作家に愛された老舗カフェ「ドゥ・マゴ」のあるサンジェルマン・デ・プレは、この教会から徒歩で5分ほど。いつでも混んではいるが、ぜひともテラスでカフェ・オレを召し上がれ。

フィナーレはやはりルーヴル美術館。ミットラン前大統領による「グラン・ルーヴル・プロジェ」(1985~1989)で誕生したガラス張りの逆さピラミッドの下には、本当に「聖杯」たるマグダラのマリアが眠っているのか??そんな果てしないミステリー・ロマンを想像しながらルーヴルを探索するのも新しい楽しみだ。そうそう、ディナーの後に時間があれば、ライトアップされたルーヴルも見て欲しい。その美しさは格別だ。



■ルーヴルの夜景は絶品!



■警備装置を作動させた絵画「聖母の死」



■ローズ・ラインの先にオベリスクが



■それはサン・シュルピス教会にあった



■「Cafe des 2 Moulins」は大盛況

幸せ運ぶ「アメリ」の暮らすパリ、モンマルトルの丘

①9 パリ・モンマルトル(フランス)

今回の舞台はパリ。最近の話題作では「ダ・ヴィンチ・コード」がルーブル美術館をはじめパリ市内でロケ撮影されたが、ルーブルはあまりにも有名すぎて…ということで、今回ご紹介するのは、ちょっと通好みかもしれないけど、ジャン・ピエール・ジュネ監督の「アメリ」(2002年)。オドレイ・トトゥ演じる22歳のアメリがパリを舞台に空想と現実を行ったり来たりする、なんともファンタジックな作品。美人じゃないけど、とってもキュートなアメリは観る人に不思議な幸福感を運んでくれる。その舞台がパリのモンマルトル地区。19世紀半ばからピカソやゴッホ、ロートレックなどが居を構え、芸術家たちのお気に入りの街だったこのエリア。その理由は、その頃すでに都市化されていったパリの中で田舎の風情を残していたからだとか。現在も歴史地区に指定されており、古い趣のあるパリの街並みが残っている。まずメトロ12号線のPIGALLE駅から5分ほど歩くと、アメリが水切り遊びをするサンマルタン運河がある。パリ市内とは思えない静かで落ち着いた雰囲気。そして再びメトロに飛び乗って、次のABBESSESで下車。この駅こそ、記念すべきアメリがニノと最初に出会った地下鉄の駅。古びた煉瓦の壁が何とも言えずいい感じだ。駅から観光名所のサクレ・クール聖堂に向かう道の途中に、コリニヨンの八百屋がある。そう、アメリが次々と悪戯を仕掛ける意地悪な店長がいた店。実際は八百屋というより果物を中心とした食料品店って感じで、優しいおばさんが対応してくれる。結構ここでは記念撮影をしている人が多い。そこからぶらぶら南西に下ってくるとアメリが働いていたカフェ「Cafe des 2 Moulins」がある。人気店らしく、いつも大勢のお客さんと賑わっている。

パリはちょっと気取った感じがありそうだが、このモンマルトル地区はとっても気さくないいムード。街並みも程良く古びて歴史を感じることができる。シャンゼリゼが苦手な思われた方は是非ともこのモンマルトル境界をご散策あれ。あなたを幸せにしてくれるアメリのようなキュートな女の子に逢えるかもしれませんよ。

Fondée MAISON DE LA
COLLIGNON

PRODUITS
SURGELES

AU MARCHÉ DE LA BUTTE

FRUITS ET
CREME



■ABBESSESの駅も古びた味わいがある



■アメリカが水遊びをするサンマルタン運河



■蚤の市がひらかれていた





■ちょっとしたフラワーアレンジもパリ風？

The Location Around The World

volume 4 (Milano/Firenze/Arezzo/Rome/Paris)



All pictures and texts were published on Japanese newspaper article to introduce splendor of each sites. These are not commercial content, but only editorial use, Therefore we never invade a right of personal portrayal, any rights of structures. And this edition is only my private memories. Please accept it.

not for sale